

## 幼児の言葉による伝え合いを育む援助に向けての実践的研究

—「幼児の『話す・聞く・伝え合う』育ちの見取り表」の活用を通して—

広島市立安西幼稚園教諭 安永陽子

### 研究の要約

幼児の言葉による伝え合いができるようになるためには、幼児の育ちの把握とそれに応じた教師の援助が重要である。そこで、本研究は、発達段階に応じ、具体的な姿を示した「幼児の『話す・聞く・伝え合う』育ちの見取り表」を作成し、そこから幼児の言葉による伝え合いを見取り、育ちに応じた援助を行うことで、幼児の言葉による伝え合いを育むことを目的とする。内容としては、「幼児の『話す・聞く・伝え合う』育ちの見取り表」を基に、実態把握を行い、見取った育ちに応じて援助を想定し、保育を実践した。

その結果、教師は、「幼児の『話す・聞く・伝え合う』育ちの見取り表」を活用することで、幼児の育ちを捉えることができ、さらに複数の教師間で、見取りを共有することができた。教師が、幼児の育ちを適切に理解し、発達段階に応じた援助を行うための一助となった。

キーワード：幼児の「話す・聞く・伝え合う」育ちの見取り表  
幼児の言葉による伝え合い

## I 問題の所在

「幼稚園教育要領解説」(H.30.3)では、小学校教育との円滑な接続を図るよう示されており、幼児教育で培われた資質、能力を小学校以降の教育に確実に引き継ぐには、何を培われたのかをより明確に示す必要があることから、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が新たに記された。そのうちの一つに、「言葉による伝え合い」が示されている。このことについて、「幼稚園教育要領解説」では、「戸惑いが多い小学校入学時に自分の考えや言葉に表せることは、初めて出会う教師や友達と新たな人間関係を築く上でも、大きな助けとなる。」<sup>1)</sup>と述べられており、小学校以降の生活や学習において極めて重要な力であると言える。

一方、「平成25・26年度 広島県幼児教育調査の結果」によると、教員・保護者に行ったアンケートでは、「自分の思ったことを相手に伝え、相手の思っていることに気付く」、「人の話を注意して聞き、相手に分かるように話そうとする」の項目に、平均点が低い結果が見られる。また、最近の1年生で特に気になることとして、「思いや考えを伝えられない」という項目が、第1位であり、91%を占めた。

所属園においては、幼児のほとんどが「友達と関わりたい」「友達と遊びたい」と思っているものの、友達と関わる中で、自分の思いを理解してもらおうと発する言葉や、友達の思いをしっかりと聞こうとする姿が少ない現状がある。教師には分かってもらおうと言葉で表現するが、幼児同士では、相手が聞いてくれなかったり、言葉が短文で正しく理解してもらえなかったりすると、その場から離れ、伝える事を諦めてしまう姿があった。自身の援助においても、幼児から発して欲しい言葉を待たず、幼児の思いを汲み取り、先に声をかけることが多かったため、幼児からの返事が短くなっていた。教師が代弁してしまい、幼児自身が考えて言葉にする場を作ることが少なかった。そのため、幼児自

身が困ったから話そうとしたり、自分の気持ちを言葉で伝えたりして、共感してもらう心地よさを味わわせるための援助が十分ではなかったと考えられる。また、幼児が話す時間が十分に取れていなかったり、幼児が話そうとすることをしっかり聞くという意識が薄かった。

## II 研究の目的

本研究では、幼児の言葉による伝え合いを育むために、幼児の伝え合いが育まれる過程を整理し、教師の援助の在り方について探ることを目的とする。

## III 研究の方法

- 1 研究主題に関する基礎的研究
- 2 研究仮説の設定及び検証の視点と方法
- 3 検証保育の計画と実施
- 4 保育実践の分析と考察

## IV 研究の内容

- 1 研究主題に関する基礎的研究

### (1) 言葉による伝え合いについて

「幼稚園教育要領解説」では、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の、「言葉による伝え合い」の項目において、「言葉による伝え合いは、領域『言葉』などで示されているように、身近な親しい人との関わりや、絵本や物語に親しむ中で、様々な言葉や表現を身に付け、自分が経験したことや考えたことを言葉で表現し、相手の話に興味をもって聞くことなどを通して、育まれていく。」<sup>2)</sup>と示されている。領域「言葉」のねらい(2)には、「人の言葉や話などをよく聞き、自分の経験したことや考えたことを話し、伝え合う喜びを味わう。」<sup>3)</sup>と、示

され、「言葉は、身近な人との関わりを通して次第に獲得されるものである」<sup>4)</sup>と記されている。また、「幼児は、自分の話を聞いてもらうことにより、自分も人の話をよく聞こうとする気持ちになる。人の話を聞き、自分の経験したことや考えたことを話す中で、相互に伝え合う喜びを味わうようになることが大切である。」<sup>5)</sup>と述べられている。つまり、5歳になったら実際にできるようになるのではなく、3歳、4歳の時期から徐々に発達していくものであると言える。幼児の言葉による伝え合いは、このように発達段階を踏まえ、様々な体験を繰り返す中で育まれると考える。

## (2) 幼児の言葉による伝え合いの育ちについて

無藤氏は、「10分間トレーニング 保育の学校 言葉による伝え合い」の中で、言葉による

伝える力は、「自分の感じることや思ったことを言葉で相手に伝えようとする」「相手の話を聞くこと」「相互に伝え合うようになること」の大きく三つの段階を経て伸びていく、と述べている。「話す」、「聞く」が「伝え合う」の一部であることから、幼児の言葉による伝え合いを育むために、教師は、「伝え合う」だけでなく、幼児の「話す・聞く・伝え合う」という一連の育ちを理解し、把握することが大切であると考え。そこで、「話す・聞く・伝え合う」の具体的な姿とは、どのような姿なのかについて理解するため、「幼稚園教育要領解説」及び、村石昭三氏による、「言語 ことば遊び」の指導計画表より、「言葉」の領域の育ちを抜き出し、「話す」・「聞く」・「伝え合う」それぞれの姿についてまとめた。さらに、それらの姿を、「初期・中期・後期」に整理し、「幼児の『話す・聞く・伝え合う』育ちの見取り表」(表1)を作成した。

表1 幼児の「話す・聞く・伝え合う」育ちの見取り表

		初期	中期	後期	
話す	幼児の育ち	○ 相手との間に安心して言葉を交わせる雰囲気や信頼関係が成立する ○ 相手に分かってもらいたいという気持ちが芽生える	○ 経験したことや考えたことを自分なりに話そうとする ○ 相手によって分かりやすい話し方を覚えていく	○ 経験したことや考えたことを自分なりに話す ○ 同じ話でも相手に応じて異なる話し方を示す	
	返事・挨拶	「はいー」と返事をする 自分の名前を言う 自分から挨拶や返事をする 「こんにちは」「ごちそうさま」を言う 「入れて」「貸して」「ごめんなさい」の言葉が使える			
	経験	簡単な用事を伝えられるようになる(伝書) 楽しかったこと、こわかったことを話す 経験したことを話す 皆の前で、経験したことや思ったことを話す	楽しかったこと、こわかったことなど話題に沿って話す 経験したことを言葉で人に話す 皆の前で、経験や行事を思い出しながら話す	楽しかったこと、印象に残ったことを発表する 経験したことを、順序立てて発表する	
	具体的な姿	自分のしたいことや思ったことを話す 喜びや楽しさを声や言葉に出す 願いごとを教師に話す 絵本や童話を聞いて、感じたことを言葉に出そうとする	自分の思ったことや考えたことを話す 喜びや楽しさを声や言葉に出す 自分の描いたイメージを言葉に表す	場所や道順を説明する 見たり聞いたりしたことを人に分かりやすく話す 草花を見たり手にしたりして、感じたことを人に話す 草花を見たり手にしたりして、感じたことや思ったことを人に話す 喜びや楽しさを言葉で表現する	
	思い考え			絵本や童話を聞いて、感じたことを話す 言葉遊び、文字遊びを楽しむ 紙芝居にしたものを、言葉で発表する 異年齢の友達に話しかける ごっこ遊びに必要な言葉を使う 理由を話す	
	要求	要求を教師に伝える 分からないことを尋ねる			
	聞く	幼児の育ち	○ 親しみを覚えている教師や友達の言葉に興味や関心をもち、聞く ○ お話を聞く	○ 自分の話を聞いてもらうことにより、自分も人の話を聞こうとする	○ 相手が伝えようとしている内容に注意を向けて聞く
		絵本・話	絵本や童話を理解して聞く 教師の指示を聞く	紙芝居の話のストーリーに沿って聞く 絵本、紙芝居、テレビ、お話のおもしろさや楽しさが分かり、聞く 注意事項を正しく聞き取る	
		教師の話	教師の話に注意して聞く 少し長い話を聞く 友達の話を聞く	教師が何を主に話したかが分かる	教師が何を主に話したか、何が大事なことが分かる、聞く
		伝え合う	幼児の育ち	○ 相手の話や思いが分かる楽しさや喜びを感じる ふれあうことが楽しくなり、言葉が出る 自分の思いを出しつつも、相手の意図にも気付く 友達との遊びの中で簡単な言葉のやり取りをする 共有物を介して相手の発言に応じた返答を行う	○ 周囲の人々の会話の仕方や話し方を聞き、自分も相手に話そうとする 友達と気持ちや思いを伝え合う お互いに思ったことを言って、考え合う 幼児同士で会話が成立する(言葉を用いてお互いの思いを伝え合う)
言葉によるやり取り			数日前に互いが共通して体験した日常性の高い出来事について、伝え合う	自分が今まで経験したことを土台にして想像力を膨らませ、相手が話している内容と同じイメージを共有する 見た絵本、テレビ、紙芝居を題材にして話し合い、考え合う	
具体的な姿					

幼稚園教育要領解説  
言語 ことば遊び 村石昭三編著より

本研究において、幼児の言葉による伝え合う姿とは、「幼児の『話す・聞く・伝え合う』育ちの見取り表」の「伝え合う」の欄に示した姿とする。

このような姿を育むために、紙芝居の読み聞かせを設定することにした。幼児が共通体験をすることで、話したくなったり、よく聞こうとしたりするためである。また、自分の物語を作り、友達と共有する楽しさが味わえるように、時間の確保をしていく。幼稚園の教師は、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を念頭におき、一人一人の発達に応じた遊びや体験をさせたり、援助したりする必要がある。教師の言葉がけ一つによって、幼児の反応は変わっていく。

教師の役割について、「幼稚園教育要領解説」には、「理解者」、「協同作業員」など様々な役割を果たすこと、また、「憧れを形成するモデルとしての役割」や「遊びの援助者としての役割」も教師の役割として大切であると、示している。

これらのことから、幼児の言葉による伝え合いを育むための教師の援助について、視点を明確にする必要があると考える。そこで、「幼稚園教育要領解説」を基に、「言葉」領域における、教師の援助について抜き出し、「活動の理解者」、「共同作業員」、「モデル」、「遊びの援助者」の四つの視点に分類しまとめ、「幼児の『話す・聞く・伝え合う』を育む教師の援助」(表2)を作成し、教師の援助を考察することとした。

表2 幼児の「話す・聞く・伝え合う」を育む教師の援助

話す	活動の理解者	1 幼児の話をしっかり聞く 2 幼児一人一人の感じたことを大切に 3 驚きの言葉に共感し、丁寧に言葉にする 4 幼児の言葉を待つ 5 幼児に、ゆったりとした態度で言葉をかける 6 幼児の活動や表情から心情を読み取り、言葉に置きかえる 7 幼児の動きを交えた表現を受けとめ、積極的に理解する
	協同作業員	1 落ち着いた雰囲気を作り、一人一人が絵本や物語の世界に没入できるようにする 2 リズム言葉で幼児の頭と心と身体を刺激させる 3 幼児の好奇心を受けとめ、言葉で応答する
	モデル	1 状況に応じた適切な言葉の表現をする 2 幼児にしてほしいことは具体的な言葉で伝える 3 個々に応じた生活や経験に対応した言葉を選び、発する 4 心の込もった豊かな言葉を語る
	遊びの援助者	1 幼児の話した内容を復唱し応答することで安心感につなぐ 2 相手との間に安心して、言葉を交わせる雰囲気や関係を成立させる 3 自分の気持ちを表現する楽しさを味わえるように、心が動かされる体験を仕組む
聞く	活動の理解者	1 幼児の好奇心に、言葉で応答する
	協同作業員	1 落ち着いた雰囲気を作り、一人一人が絵本や物語の世界に没入できるようにする 2 リズム言葉で幼児の頭と心と身体を刺激させる 3 幼児と共に遊ぶ 4 幼児同士の話を引き出し、そのやり取りをみんなに返す 5 絵本や物語から、想像上の世界や未知の世界に出会い、様々な思いを巡らし、その思いを共有する
	モデル	1 幼児と共に聞く
	遊びの援助者	1 興味のある話をする 2 内容や伝え方を工夫する 3 友達の話聞く場をつくる 4 「聞く」態度や意欲が増すような環境づくりをする 5 絵本や物語などを見たり、聞いたりすることで、言葉の楽しさや美しさに気付かせる
伝え合う	活動の理解者	1 幼児の気持ちに添って会話をすることで、親しみを感ずってもらえる
	協同作業員	1 幼児と一緒に行動をしたり、やり取りをする 2 自分の気持ちを的確に言葉で表現することが、難しい幼児に対し、その気持ちに寄りそう
	モデル	1 状況に応じた適切な言葉の表現をする 2 幼児に獲得して欲しいと願う言葉を、日頃から積極的に使う 3 言葉を交わす喜びや豊かな表現などを伝えるモデルとしての役割を果たす
	遊びの援助者	1 落ち着いた場の設定をする 2 周囲の人々の会話の仕方や話し方を聞くことができるように場を作る 3 友達同士で自由に話せて、心の交流が図られるように環境を構成する 4 やり取りでは、幼児が自分の気持ちを出し、相手の気持ちを受け入れられるように手助けをする 5 個人差について受容し、幼児の言動をよく観察し安心して話すことのできる場を提供する 6 やり取りから活動が共有されていく満足感が味わえるようにする 7 心を傾けて、幼児の話や、その背後にある思いを聞く 8 状況に応じて仲立ちをして言葉を付け加えたり、思いを尋ねていくことで、話が伝わり合うようにする 9 幼児同士の会話が弾むように他の幼児と意思の共有をする
話す	0-1	幼児と共に楽しむ
聞く	0-2	幼児同士の共通体験をさせる
伝え合う		

## 2 研究仮説の設定及び検証の視点と方法

### (1) 研究仮説

「幼児の『話す・聞く・伝え合う』育ちの見取り表」を基に、言葉による伝え合う力を見取り、育ちに応じた援助を行えば、幼児の言葉による伝え合いを育むことができるだろう。

### (2) 検証の視点とその方法

検証の視点と方法については表3に示す。

表3 検証の視点と方法

	検証の視点	検証の方法
1	幼児の言葉による伝え合いを育むことができたか。	教師が「幼児の『話す・聞く・伝え合う』育ちの見取り表(表1)」から、幼児の変容を項目ごとに評価する。
2	「幼児の『話す・聞く・伝え合う』育ちの見取り表」を活用し、育ちを見取り、育ちにに応じた援助を行うことができたか。	幼児の姿に対する教師の援助についてビデオとボイスレコーダーから、行動と言葉を書き起こし、表2を用いて、分析を行う。

## 3 検証保育の計画と実施

### (1) 対象

幼稚園5歳児

抽出児A児(男児), B児(女児), 2名

### (2) 期間

平成30年10月18日～10月24日

### (3) 指導上の留意事項

#### ア 実態把握

5歳児25名を「幼児の『話す・聞く・伝え合う』育ちの見取り表」を基に、実態把握を行った。同年齢の友達とのかかわりでは、遊びを楽しむ姿は見られたが、言葉による伝え合いについては、自分から積極的に言葉を使って友達にかかわろうとする幼児は少ないと感じた。ほとんどの幼児は、教師の話を理解して聞き、教師

に自分の思いを話すことができる。しかし、幼児同士の伝え合いの姿においては、自分の思いを言葉で強く主張する幼児に流されてしまったり、話すことを諦めたりする姿が見られた。

「話す」については、後期(表1参照)にさしかかっている幼児もいるが、「聞く」、「伝え合う」については、初期の幼児もおり、全体的には、中期の育ちの幼児が多かった。中には、「話す」は、後期の育ちであるが、「聞く」は初期の育ちであるなどアンバランスな育ちの幼児がいることが分かった。そこから、「話す」、「聞く」、「伝え合う」がそれぞれ中期の育ちである幼児を男女1名ずつ、抽出児とした。

#### A児(男児)

気の合う友達と気持ちや意思を伝え合い、自分の思いを言葉にして遊ぶことができる。しかし、少し心配なことが起きると、自分に自信がなくなり、言葉数も少なくなってしまう。気の合う友達と同じ経験をしていないと、イメージの共有ができず、気持ちを伝え合うことができない。

#### B児(女児)

自分の経験したことや、聞いてほしいことがあると自分から進んで話をしようとする。周りの友達の話す内容が、自分には興味のないことだと、友達の話す話を注意して聞こうとしなくなってしまう。遊びの中で、あまりかかわりがない友達との会話は、どのように話してよいのか分からない様子で、弾まないことが多い。

#### イ ねらい

紙芝居づくりを通して、相互に伝え合う喜びを味わう

#### ウ 幼児の具体的な姿

本時における幼児の「言葉による伝え合い」についての具体的な姿を下記の四つとする

- ・ 同じ経験をしていない友達に対しても会話が続く
- ・ 決まりや約束を話し合う
- ・ 自分が今まで経験したことを土台にして想像力を膨らませ、相手が話している内容と同じイメージを共有する

- ・ 見た絵本、紙芝居を題材にして話し合い、考え合う

#### 4 保育実践の分析と考察

#### エ 指導にあたって

幼児の実態を踏まえ、絵本の読み聞かせを行い、そのストーリーを基に、自分なりのお話を想像して、言葉による伝え合いに焦点をあてる遊び「紙芝居づくり」を設定する。幼児が、自分の思ったことや考えたことを4～5名のグループで伝え合える場を設定する。教師は、幼児の姿から「話す」「聞く」「伝え合う」の姿を見取り、「初期・中期・後期」のうち、現在の姿に応じた援助を行う。また、「話す」姿については、「話す」援助を行い、「聞く」姿については「聞く」援助、「伝え合う」姿については「伝え合う」援助、というように、それぞれの姿に応じた援助を行う。保育後に、複数の教師と共に、「幼児の『話す・聞く・伝え合う』育ちの見取り表」(表2)を基に、幼児の育ちの共有及び保育の振り返りについて、カンファレンスを行う。教師は、育ちに対する援助を振り返り、翌日の保育方針を定める。

#### (1) 幼児の言葉による伝え合いを育むことができたか

5日間の検証保育期間中、毎日、保育後に複数の教師でカンファレンスを行った。参加者はその日の保育を通して、「幼児の『話す・聞く・伝え合う』姿の見取り表」を基に、抽出児の見取りを行った。検証保育1日目から5日目までの期間、各項目ごとの姿が見られたと判断した場合は、色を付け可視化して示すことにした。

#### A児について

A児の5日間の言葉の伝え合いの姿について、表4に示す。色が濃くなるほど、多くの教師が評価していることを表している。「伝え合い」の姿については、太枠で囲んでいる部分である。

5日間のうち、4日間に伝え合う姿が認められた。中期の段階から表れる「幼児同士で会話が成立する」姿は、頻繁に見られたが、「同じ体験をしていない友達に対しても会話が結

表4 幼児の「話す・聞く・伝え合う」育ちの見取り表 (A児)

育ちの項目	初期					中期					後期				
	1日	2日	3日	4日	5日	1日	2日	3日	4日	5日	1日	2日	3日	4日	5日
始発の育ち	● 言葉の間に安心して話せる状況が常態化している					○ 話し合いの場を自ら作り出す					● 話し合いの場を自ら作り出す				
言葉・表現	「はーい」と返事をする					自分の名前を言う					自分の名前を言う				
	自分の名前を言う					自分の名前を言う					自分の名前を言う				
	「これには「ごちそうさま」を言う					「入れて」「貸して」「ごめんね」の言葉が使える					簡単な用事を伝えるようになる(伝言)				
	簡単な用事を伝えるようになる(伝言)					楽しかったこと、こわかったことなどを話す					経験したことや思ったことを話す				
経験	楽しかったこと、こわかったことなどを話す					経験したことや思ったことを話す					音の前で、経験や行事を思い出しながら話す				
	経験したことや思ったことを話す					音の前で、経験や行事を思い出しながら話す					見たり聞いたりしたことを考えて話す				
	見たり聞いたりしたことを考えて話す					車花を見たり聞いたりして、感じたことを口にする					自分の思ったことや感じたことを話す				
	自分の思ったことや感じたことを話す					喜びや楽しさを言葉に出す					喜びや楽しさを言葉で表現する				
思い伝え	喜びや楽しさを言葉に出す					喜びや楽しさを言葉で表現する					喜びや楽しさを言葉で表現する				
	喜びや楽しさを言葉で表現する					喜びや楽しさを言葉で表現する					喜びや楽しさを言葉で表現する				
	喜びや楽しさを言葉で表現する					喜びや楽しさを言葉で表現する					喜びや楽しさを言葉で表現する				
	喜びや楽しさを言葉で表現する					喜びや楽しさを言葉で表現する					喜びや楽しさを言葉で表現する				
要求	要求を教師に伝える					要求を教師に伝える					要求を教師に伝える				
	要求を教師に伝える					要求を教師に伝える					要求を教師に伝える				
	要求を教師に伝える					要求を教師に伝える					要求を教師に伝える				
	要求を教師に伝える					要求を教師に伝える					要求を教師に伝える				
始発の育ち	話し合いの場を自ら作り出す					話し合いの場を自ら作り出す					話し合いの場を自ら作り出す				
	話し合いの場を自ら作り出す					話し合いの場を自ら作り出す					話し合いの場を自ら作り出す				
	話し合いの場を自ら作り出す					話し合いの場を自ら作り出す					話し合いの場を自ら作り出す				
	話し合いの場を自ら作り出す					話し合いの場を自ら作り出す					話し合いの場を自ら作り出す				
言葉・表現	お話を聞く					お話を聞く					お話を聞く				
	お話を聞く					お話を聞く					お話を聞く				
	お話を聞く					お話を聞く					お話を聞く				
	お話を聞く					お話を聞く					お話を聞く				
教師の姿	お話を聞く					お話を聞く					お話を聞く				
	お話を聞く					お話を聞く					お話を聞く				
	お話を聞く					お話を聞く					お話を聞く				
	お話を聞く					お話を聞く					お話を聞く				
始発の育ち	相手の話を聞いて、自分も相手と同じ気持ちになる					相手の話を聞いて、自分も相手と同じ気持ちになる					相手の話を聞いて、自分も相手と同じ気持ちになる				
	相手の話を聞いて、自分も相手と同じ気持ちになる					相手の話を聞いて、自分も相手と同じ気持ちになる					相手の話を聞いて、自分も相手と同じ気持ちになる				
	相手の話を聞いて、自分も相手と同じ気持ちになる					相手の話を聞いて、自分も相手と同じ気持ちになる					相手の話を聞いて、自分も相手と同じ気持ちになる				
	相手の話を聞いて、自分も相手と同じ気持ちになる					相手の話を聞いて、自分も相手と同じ気持ちになる					相手の話を聞いて、自分も相手と同じ気持ちになる				
言葉による伝え合い	相手の話を聞いて、自分も相手と同じ気持ちになる					相手の話を聞いて、自分も相手と同じ気持ちになる					相手の話を聞いて、自分も相手と同じ気持ちになる				
	相手の話を聞いて、自分も相手と同じ気持ちになる					相手の話を聞いて、自分も相手と同じ気持ちになる					相手の話を聞いて、自分も相手と同じ気持ちになる				
	相手の話を聞いて、自分も相手と同じ気持ちになる					相手の話を聞いて、自分も相手と同じ気持ちになる					相手の話を聞いて、自分も相手と同じ気持ちになる				
	相手の話を聞いて、自分も相手と同じ気持ちになる					相手の話を聞いて、自分も相手と同じ気持ちになる					相手の話を聞いて、自分も相手と同じ気持ちになる				



表6 B児の事例

幼児の実際の言動	実際に行った援助
○グループでの伝え合う活動を行い、おまつりをイメージして絵を描いた 自分達が描いた絵を貼り、場所を決めようとした	<B児とD児だけでなく、グループ内での話し合いを共有するため、話し合いの場を設定した>
○B児とD児が描いたおまつりの入り口の絵をグループ内に提示し、1つの画用紙にまとめるために、どの場所に貼るか決めようとしていた	<B児に向けて> ・「今の話を皆にお話しした?」 …話す④
B児:「この入り口を、真ん中とこっちについたら終わりね」	
B児:「ううん、お話ししていない・・・」と、濁したようにゆっくりとした口調で話す	・「え?お話ししていないの」 …話す②
B児:「うん、皆にはしていない」	<B児とD児が話した内容をグループの他の幼児とも共有してほしいと願い、手を添えて場所の指定をし集合させた> ・「そっか..じゃあ..ここはグループは集合して..」 …話す①
○教師が指定した場所に頭を寄せて集まる	<B児の言葉で話させようとした> ・「B児、言いたいことや、知らない人がいるよ」 …話す② <少し声を大きく出し、その場の雰囲気高めようとした> ・「作戦タイムをしましょう..B児からお話があります..」 <昨日も話に出ていたことに気付かされたため、内容を丁寧に話すことで、グループの幼児に興味をもたせようとした> ・「昨日の続きですが...」
B児:「入り口は、あっちと真ん中にあります。でも、D児は分かっているよ」	<B児の「あっち」と「真ん中」という言葉では、どの場所のことを差すのかが、他児には分かりにくいと感じたため、声をかけた> ・「皆で、絵を見て話してみる?」 ・「B児は、おまつりの入り口を作ったんだよね..」 …伝え合う⑧
B, D児:「うん」とうなづく D児がB, C, E, F児に向けて、「ここ」の場所を手で示しながら話す	<D児には話していたことを認めてほしいB児の思いを受け止めた> ・「D児は知ってたんだよね」 …伝え合う⑦
D児:「うん、こう行くと、ここを通れるし、こちから入ると、ここを通れるんだ」	<C児がグループから少し離れて聞いていたため、「ここ」においてと手で招いた> ・「C児、聞いてね」 …聞く① …聞く④
C児は指摘をされ、はっとしてD児の方を向き D児の話の聞こえようとする	

B児:「D児は、こっちがいいって言って、私は、真ん中が入り口がいいって思う。じゃあ、入り口をあっちとこっちへつけようか」	<B児とD児の言葉を受け止め、一つの絵にまとまるような声をかけた> ・「じゃあ、入り口をつなげよう、いい考えだね、じゃあ、描こうか」 …伝え合う⑧
B児は、手で「こっち」を表し、友達に分かりやすく話した	
D児:「私は、ここに入り口を付けたくて、B児は真ん中につけたいよね」	
B児:「うん」	
B, D児が入り口を付ける。C児が手伝う	
B児:「私は、ここに花火を描くよ」	
D児:「私は、氷を描くよ」	
C, E, F児は、聞きながら、残りの時間は、思い思いの描きたい絵を言葉で確認しながら描いた	

表6 下線部に示す通り、B児は、仲の良い友達D児とは、思いを伝え合い、互いに理解し合っている様子が伺えた。一方で、表5 (波線) で示す通り、D児以外の友達とは、伝え合いが成立しにくい様子が見られた。教師は (点線) のように他児との伝え合いにつながるよう援助を行ったが、B児はD児に話しかけ、他児との伝え合いには、至らなかった。このことから、伝え合いを育むためには、相手との関係性が大きく影響していると考えられる。今回、グループ編成をする上で、相性の考慮を行ったが、単に気が合うだけでなく、普段からつながりがあり、良好なかかわりを積み重ねていることが大切であると考えられる。

### 考察

A児, B児共に、中期以降の伝え合う姿が見られた。「話す・聞く・伝え合う」の全体的な見取りでは、伝え合う姿に比べ、「話す」や「聞く」姿が多く見られた。「話す」や「聞く」については、後期以降の姿も表れており、このことは、無藤氏の述べているように、言葉による伝える力は、「話す」・「聞く」から、「伝え合う」へと段階的に関連し合って育っていくことを示し



ている。5日間のうちに、A児に、後期以降の姿は見られなかったが、中期の育ちであるA児は、中期の伝え合いの育ちを見せていた。現段階の幼児の話す姿や、聞く姿を丁寧に見取り、育ちに応じて育てることで、幼児同士の伝え合いの姿が表れるものとする。教師は、無理に後期の姿を目指さず、現在の姿に応じた援助を行うことが大切であるとする。現段階の育ちを理解し、伝え合いを育むためには、伝え合いの姿だけに注目せず、「話す」「聞く」姿にも視点をおき、幼児の実態を探り、十分に時間をかけて援助していくことが必要であるとする。

(2) 「幼児の『話す・聞く・伝え合う』育ちの見取り表」を活用し、幼児の言葉による伝え合いの育ちを見取り、育ちに応じた援助を行うことができたか。

「幼児の『話す・聞く・伝え合う』育ちの見取り表」を基にして、幼児の「話す」「聞く」「伝え合う」の具体的な姿をイメージし、「幼児の『話す・聞く・伝え合う』を育む教師の援助」(表2)から、援助を想定し、保育を行った。実際の保育における幼児の姿に対する教師の援助についてビデオとボイスレコーダーから行動と言葉を書き起こし、「幼児の『話す・聞く・伝え合う』育ちの見取り表(表2)」を用いて分析を行った。

A児について

ビデオ分析により、教師とA児が一对一で、A児の描いた絵についてやり取りをした後、A児が、教師のいない所で、教師とのやり取りと同じやり取りを友達と行っていた場面を確認した。A児と教師のやり取りを表7に示す。

教師が、「伝え合う」姿を求めて、無理に、周りの友達とつなげようとせず、A児の姿に合わせ、「活動の理解者」として、A児がしっかり思いを「話す」援助を行っている。このことが、後のA児の伝え合う姿につながったとする。5日間を通して、教師は、A児に対して「話す」ための援助を多く行っており、周囲に対しては、「聞く」援助を多く行っていた。援助の視点と

しては、「活動の理解者」、「遊びの援助者」が多く、「モデル」は、ほとんど行っていなかった。

表7 A児の事例

幼児の実際の言動	実際に行った援助
A児:「ここは、人魚の部屋」	<p>&lt;A児に向けて&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「絵がすてきね、お話になってるね、聞かせて」</li> <li>・「これは？」 …話す①</li> </ul> <p>(A児にストーリーを作らせ、話させようとした)</p>
A児:「ここは、お金の部屋」	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「人魚に会えるの?」</li> <li>・「先生も行ってみたいね」</li> <li>・「これは?」 …話す①</li> </ul>
A児:「ここはプール」	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「お金の部屋っていいね」</li> <li>・「まってね、ここは、人魚に会えるよ、でしょ」 …話す⑥</li> <li>・「ここは、大きなプールで泳ぐんだ、でしょ」 …話す⑥</li> <li>・「ここは、お金の部屋でしょ」</li> <li>・「で、これは?」 …話す④</li> </ul>
A児:「火山」	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「すごいね、火山よ、火に当たらないでね、だね」 …話す⑥</li> <li>・「これは、お化けじゃね」</li> <li>・「これは?」 …話す④</li> </ul>
A児:「雨と傘」	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「雨が降ったら、傘が使えるんだ、やさしいね」 …話す⑥</li> </ul>
A児:「ちがう、行かんよ。透明人間が行くんだ」	<p>&lt;A児に向けて&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「A児がここに行くわけ?」</li> </ul> <p>(A児の言葉を繋げ、A児が描いた絵にストーリー性をもたせようとした)</p>

B児について

B児は5日間を通して、仲の良いD児と一緒に遊ぶことが多く、検証保育の後半では、教師のいない所でも、D児とお互いに描いた絵について話し、貼り合わせる相談や門を付けようというアイデアを出し合ったりしていた。D児に上手く伝わらない場面では、教師は、「聞く」、「話す」の援助を行い、仲介を行った。全体的に「活動の理解者」「遊びの援助者」の援助を多く行っていた。B児はD児との伝え合いを自信をもって行っていたが、D児以外の幼児との伝え合いには至らなかった。教師は、B児に対し

て積極的な援助を行ったが、周囲の幼児に対しても同様に、「遊びの援助者」の「8 状況に応じて仲立ちをして言葉を付け加えたり、思いを尋ねていくことで、話が伝わり合うようにする」や「9 幼児同士の会話が弾むように他の幼児と思いの共有をする」などの援助が必要だったと考える。また、その際は一人一人の育ちに応じた援助が必要であることから、「話す」、「聞く」に対する援助を丁寧に行うことが求められると考えられるが、この場面では、B児の育ちに合わせ、中期の「伝え合う」育ちの援助を、周囲の幼児に対しても行っていたため、B児とD児の伝え合いにとどまったと考えられる。

### 考察

教師の援助が幼児の育ちに応じていないところでは、幼児同士の伝え合いができていなかった。教師が一对一で、あるいは少人数で、「話す」や「聞く」ための援助を十分に行うことが、後の幼児同士の伝え合いにつながると考えられる。中期～後期の育ちの幼児には、「活動の理解者」や「協同作業者」など、幼児と横並びのかかわりをしながら援助を行うことが、伝え合いを育むために効果があることが分かった。幼児の見取りを明確にし、個々の育ちに合わせた教師の援助が重要である。教師がその場の援助のみにとどまらず、個々の幼児の育ちを見通した援助を行うことが、幼児の言葉による伝え合いを育むことに密接にかかわっていくことが分かった。

## V 研究のまとめ

### 1 成果

伝え合いの姿は、「話す」「聞く」「伝え合う」を行きつ戻りつしながら、育まれることが分かった。「幼児の『話す・聞く・伝え合う』育ちの見取り表」(表1)を活用することで、幼児の現在の姿と将来、育てたい姿との両方を具体的にイメージし、保育にあたることができた。幼児の育ちを見取り、育ちを理解し、次への援助の

方向性を決めていくためにも、「幼児の『話す・聞く・伝え合う』育ちの見取り表」(表1)の活用は、大変効果が高かった。教師は、幼児の後期の姿を求め、「できていない」、「課題がある」という見方ではなく、現在の育ちを捉え、育ちに応じた援助を行うことで、幼児は自信をもって話すことができ、やがて伝え合う姿へと繋がっていくことを確認することができた。また、検証保育後の教師のカンファレンスにおいて幼児を見取る際に、「幼児の『話す・聞く・伝え合う』育ちの見取り表」を共通の資料とすることで見取りの視点が定まり、教師間での共通認識を図ることができた。教師間の情報交換や保育後のカンファレンスを密にして援助を行うことが効果的であった。

### 2 課題

今回の保育にあたり、「幼児の『話す・聞く・伝え合う』育ちの見取り表」に示したどの姿にも当てはまらない姿があった。今後、さらに具体的な姿を加筆し、より使いやすいものにしていきたい。また、項目によっては、「初期」～「後期」の判断がしにくい姿もあるため、今後、活用しながら、「幼児の『話す・聞く・伝え合う』育ちの見取り表」の精度を上げていきたい。

「幼児の『話す・聞く・伝え合う』育ちの見取り表」があることにより、見取りの視点が定まるが、長期的に育てていくためには、その日限りのことではなく、定期的に記録を残し、振り返りや見直しを行う必要がある。幼児一人一人の育ちをもれのないように把握することや、時間の確保などに努めたい。

教師間のカンファレンスにおいて、抽出児の具体的な姿や対応した教師の援助について話し合い、共通理解を図った。今後は、「このような姿から次は、このように援助しよう」という次への保育方針を検討する細かなカンファレンスになるよう、充実を図りたい。個々の幼児の育ちを確認し、共通したねらいをもって援助にあたるよう努力していきたい。

「幼児の『話す・聞く・伝え合う』を育む教

師の援助(表2)」については、今回は、十分な活用に至らなかった。「幼児の『話す・聞く・伝え合う』育ちの見取り表」との関連について継続して研究をすすめ、現状の幼児の姿と照らし合わせながら、教師の援助をより明確に示せるようにしていきたい。

幼児同士の言葉による伝え合いを育むためには、友だち同士の良好な関係を支えるとともに、まずは、教師が、幼児と一人一人の確かな関わりが重要であった。気になる子や、積極的にかかわってくる子どもに合わせた援助になりがちであるが、個々の育ちを的確に見取り、一人一人に応じた援助を行う努力をしていきたい。

#### 引用文献

- 1) 文部科学省『幼稚園教育要領解説』平成30年 71頁
- 2) 前掲書 1), 70頁
- 3) 前掲書 1), 213頁
- 4) 前掲書 1), 213頁
- 5) 前掲書 1), 213頁

#### 参考文献

- ① 広島県教育委員会 『平成25・26年度 広島県幼児教育調査の結果』 平成27年3月
- ② 文部科学省『幼稚園教育要領解説』平成30年
- ③ 無藤 隆 『10分間トレーニング 保育の学校 5領域 編 第4講 言葉による伝え合い』
- ④ 村石 昭三 『言葉 ことば遊び』1991年
- ⑤ 国立教育政策研究所教育課程研究センター『幼児期から児童期への教育』ひかりのくに株式会社 平成17年
- ⑥ 馬見塚 昭久/小倉 直子『保育内容「言葉」指導演法』2018年
- ⑦ 大越 和孝/安見 克夫/高梨 珪子/野上 秀子 齋藤 二三子 保育内容「言葉」『言葉とふれあい、言葉で育つ』2018年
- ⑧ 横山 真貴子 『子どもの育ちと「ことば」』 2011年
- ⑨ 中川 信子 『ことばを育む』 1986年